

第32期横浜市社会教育委員会議 第3回会議録	
日 時	令和元年7月2日（火）午前10時～正午
開催場所	花咲研修室 205号会議室
出席者	司会：牧野議長 グループ1：大川委員、小間物委員、七澤委員、室田委員 グループ2：有元副議長、石崎委員、柿沼委員、菊池委員
欠席者	奥山委員
開催形態	公開（傍聴人1名）
議 題	1 開会 2 議事録の確認について 3 議事 事業案検討に向けたグループワーク 4 その他・次回の開催予定
決定事項	議事録確認者に菊池委員、小間物委員を指名。 第4回社会教育委員会議の日程を令和元年10月28日（月）13時～15時に決定。
議 事	事業案検討に向けたグループワーク  （ ）は事務局より補足で記載しております。  牧野議長：前回の会議ですが、子どもたちを対象にして、子どもに関わることで、大人の方々の社会参加を促す、地域の参加を促す、という方向性はどうかというふうに話をした。そこで子どもたちを対象に実践されている2つの団体から（活動の）ご紹介をいただいた。 そして、各団体の活動の紹介を踏まえて、中高生の良いところは何か、また、これらを一人の子どもとすると、どんな子どもになるのか。さらには、このような子どもたちを支えるためには、大人が何をすべきなのかという内容でグループワークをした。前方の画面、又は手元の資料を見ていただきたい。【資料1】前回のグループワークの内容である。これを2つの班に分かれて行ってもらった。一方の班では、中高生の良いところとして6つぐらいの大きな中身が示された。一つはしがらみがないこと、その中で特に相手への思いやりや心遣いがある、世間の利害関係に染まっていない、周りを気にしないなどがある。また自由さということで、夢を創造できる、無邪気であるが現実を見ようとする力があるのではないかと。また、発想にしばられていないなど。それから仲間意識が強かったり、仲間遊びがうまい。それから大人に可愛がられることが多いということ。さらには遊びもできる、好きなことに集中できる。可能性としては新しいものに飛びついたり、伸びしろがたくさんある。新しい体験に対して新鮮に感じる。又は身体を中心に様々な関わりを持っているんじゃないか、笑いがあつたりボディランゲージ、言葉だけに頼っていないというようなそういうのがあるのではないかとという議論だった。 それから第2班の方は、率直な情熱ということで、感情に正直であったり、やりたいと思う気持ちが原動力になっている。それから楽しもうとする力や楽しむ力がある。さらには本質的なところを見ているのではないかとという議論だった。さらに、団結力と一体感があるということで、友だちと率直な会話ができたりよく協力したり、仲間意識から来る結束力があるのではないかと。さらには自由と可能性ということで、社会的な

可能性を度外視できる。しがらみがない。また人間としては可能性のかたまりではないか。また発想が自由である。さらには失敗を恐れないようなことがあるのではないかとということで議論した。

そして、これらを一人の子どもとして全体を作り出してみるとどんな感じになるかという、一般論だが、自由で定まっていないからこそ、可能性があるのではないかとということ。さらには言葉だけではなく、身体を使って、さらには友達と遊びを通じて社会性を育てている。こういう人間が一つ描けるのではないか。さらには、いいところを全部持っている。ではどういうことなのかということ少し考えた方がいいのではないか、さらには地域社会に必要な存在だろうというまとめになった。そして、このような子どもたちを支えるために、大人はどうしたらいいのか、という話をしてもらったが、この4つのような内容に分かれるのではないか。

一つは理解していくということ。柔軟に受け止めて、決めつけない。それから、よかれと思って先回りをしたりとか過度の期待をすることもあまりよくないのではないか。そして、失敗も学びであるので、そこを先回りして予防するよりは、それを見守るような関係が必要ではないかという話があった。さらには伝えていくということで、大人が先に生きている者として、子どもたちに伝えるべきことを伝えていくということ。それから、「伝える」ということと「伝わっている」ということは違うということ、大人が理解する必要があるのではないかとということ。さらには、子どもに選択肢をきっちり用意すべきではないか。チャンスとか、選べる最低限のスタートラインを平等に保障する必要があるのではないかとということ。子どもたちが自由に選んでいく意思を尊重する必要があるのではないか。そして、身体を使う活動ということで、とにかくやってみるということを尊重する。さらに仲間と一緒に楽しくて参加できるような場所を設定しておく必要があるのではないかと話があった。

前回のグループワークは、一つは、子どもたちを基本にしながら大人たちが関わりを持つという形で社会参加のすそ野を拓いていくという議論の中で出てきたものだが、子どもたちのいいところを探していきながら、それをどうしたら伸ばせるのか、そのためにはどうしたらいいのかという議論をしていただくことになる。

それで、今日のグループワークだが、前回のグループワークを議論の中心にしながら、もう少し具体的に、どうしたら子どもたちに関わって、大人がもう少し社会参加をしていくという動きを作ることができるのかということ少し話し合えればと考えている。今日、私の方から少し形としてお示ししたいと思っていたのは、例えば、こういう子どもたちに対して大人がどう関わるかということに、こういう子どもたちのイメージが作られていて、ある意味では、これから新しい社会を担っていく子どもたちとして、自由で定まっていないということ、さらには言葉だけでなく身体も使って社会性を育てていく。さらには自分は社会にとって大事な存在なのだという議論があった。そして、こういういいところがいっぱい示されているところを踏まえて、できたら、中学校又は中学生を基本に考えながら、大人がどう関わっていくと彼らが様々な形で自分の人生をより主体的に歩いていくことができるようになるのか、それをどう支援するかといったことを基本に今日は議論することができないかと考えている。

そうすると、例えば中学校と地域社会との関係、そして中学生を基本に置くと、例えばそこから先、高校生をどうするのか、さらに下の小学生

がどう関わってくるのかといったことも今後議論ができるのではないかというふうに思う。そういう意味では、今日は中学生くらいを念頭に置き、更にその子たちと地域社会との関係で大人がどう関わっていったらよいのかということも議論できないかというふうに考えている。

もう少し言うと、あとからまとめでも言うが、前回のグループワークの最後の方で、私の方から文部科学省の方向性として、コミュニティスクールということが打ち出しをされていて、そして、地域学校協働という議論が強く今押し出されている。従来は、学校支援地域本部というような形で地域が学校を支えるという議論をしてきたが、実は来年度から始まる新しい学習指導要領は、地域と学校が両輪となって子どもを育てていくということを基本に作られているので、地域が学校を支えるという発想ではもうなくなっている。もう4年前になるが、新しい学習指導要領を作るときの基本となる考え方として、社会に開かれた教育課程ということが言われていて、その中で、カリキュラムはもう学校では完結しないとやったことを中教審が宣言したということになっている。それで質も量も追及するという形になっていて、教科書のページ数が1万ページ程になるという、とても学校では終わりきらない程内容を詰め込んだものになっているが、そういうのは基本的に学校では終わらないことを前提に作ったというふうに言われている。これは、学校で学んだことを使って一生生きられる社会ではなくなってしまっていて、むしろ学び続ける力をつけていく。それは自ら学校で学んだことだけでなく、学校を卒業しても一生学び続けるといったことをできるような力をつけてもらうために学校で教育を行うのだというふうに変ってきている。そういう意味では、地域と学校が一緒になって子どもを育てることができませんかという議論になっている。

そういう意味では、今回の社会教育委員会議事も議論されると、どちらかというとも中学校区を基本にしながら、中学生と地域社会、大人たち、そしてそれを中学生が社会の大人と一緒にやって様々な活動をする中で、中学校、さらに大学とか進学していく過程で、自らの人生を設計できる力をつけていくことが基本となっていくのではないかと思う。さらには、新しい(学習)指導要領は英語とプログラミングが盛んに今言われていて、そちらの方に議論が動いてしまっているが、基本は言語活動と体験活動ということがベースになっていて、いわゆる認知能力と非認知能力というのが、ペーパーテストで測れる従来の学力と言われているものと、自己肯定感とか自己効力感とかコミュニケーション能力とか復元力、失敗してもやり直そうと思える力とか、調整しようとする力とか、非認知能力とっているものを重視しようということになっている。そして、またこれも議論が後から出てくると思うが、非認知能力が大事だと言われると、またこちらに動いてしまって非認知能力をつければいいんだろうという議論になりがちだが、いわゆる自己肯定感のようなものと言語活動という言葉を使った認知能力は分けられるものなのかということも議論にはなっている。そういう意味では言葉を使って、社会と自分との関係をつけることができるか、そういうことが自分がちゃんと社会に位置付いているんだという感覚を持つことができることになっていって、非認知能力を高めていくことになるのではと思う。そういう意味ではもう少し大人と関わりながら、身体と言葉を使って関係を作っていくながら、自分がこの社会で生きているんだと思えるような環境を作っていく。そのためにも大人がどう関わったらいいかという議論をしておくべきではないかということ。そういう意味で、今日のグループワークでは、漠然として分かりにくいかもしれないが、前回のグループワ

ークを基本としながら各委員の方々のイメージされる中学生くらいの子どもたちに、大人がどう関わったらいいのか、そしてどういう形で彼らと交流をしていながら彼らの人生を励ますような形の関わり方ができるのかといったことを議論できればと思う。

それを議論いただいた上で、今後その中でより具体的にどんなことをしていったらいいのかということ、これからまた話し合ってもらいたいと思うがいかがか。

これから一時間くらいになるが、皆さんの考えを書き出したり、言葉にさせていただいて、ご議論いただきたい。

室田委員：少し質問が。この会議は、世界の幅広い層に教育なり何か関わっていくのか。それとも地域を支えたりとかそういうことなのか。

牧野議長：基本は先ほど渡邊部長からもお話しがあったが、大人たちの地域社会の参加を促すということがベースで、全体の議論としては直接大人たちと言っても中々難しいので、子どもへの関わり、次の世代をどう支えていくかといったことに関わっていただきながら、大人の社会参加を促していくし、子どもたちの社会参加へ繋げていくという議論ができないかということに方向性としてはなっている。

室田委員：今回はその中のどんな感じのところをやっていくのか。

牧野議長：前回の議論を基本としながら、少し子どものイメージを中学生くらいに固めてもらい、中学生に大人が関わる形で、大人自身がどう社会参加をしていくのかというような議論に繋がればと思う。まずお願いしたいのが、子どもたちに対して大人がどう関わると、様々ないいところを持った子どもたちがより生き生きできるような環境ができるかというのを最初議論いただければと思う。

各グループに小間物委員と石崎委員がいるので、少し学校の状況のことも話しながらと思う。

#### ■グループワーク 1

テーマ：中高生の子どもに大人がどう関わると子どもの人生をより良くできるか。

#### ■発表

七澤委員：こちらのグループは、このお題のところに行きつくまでに色々な社会的構造の仕組みや経済の仕組みや世界の事例、SDGs、ドイツ、ヨーロッパ、香港の今の若者の動きなど、そのようなグローバルな話に飛んでしまった。結果的に、このお題も地域の大人が子どもの人生に関わるにはということ、最初に色んな地域の受け皿が必要なのではないかとか、最初の方では前々会議で議論があった部活動の問題で、中学生が放課後に地域で社会活動したらどうかなど。ただそこで地域に返して、社会に返したところで、指導者の資格はどうなのかとか、怪我が起こった時にどうなるのかとか、色んな場を作った後も継続していく仕組みが難しい。色々な問題が出てくる。場は作りませんでしたダメ。そもそも関わる機会というのもやっぱり少ないというところで、先ほどの、じゃあ何なのだろうというところで社会の仕組みとか構造的な不備というのがここには生まれてくるのではないかとということで、色々な先生方の話を聞かせていただいて、ではどうすればいいかというところで、議論は今途中になっている。

有元副議長：激しく楽しく議論した。大人がどう関わるかというのは、カメラが大人側にあるが、ここで話したときは、子どもと関わることで大人も変わっ

て、どちらからも双方向的に変化があるだろうという話になった。一番大事なのは「社会参加の再生産のループもしくは螺旋が作られること」だろうと。それがないと一発こっきりの工夫だとすぐ途絶えてしまう。両方が関わり合い続ける。大人、子ども、地域、学校が関わり合い続けるような仕掛け、仕組みをしなければいけないだろうという話になった。楽しさの工夫とか、何か憧れさせるとか、主体になれるとか、理解できるとか、そういうことを仕掛けて、再生産のループが動くようにしたいというようなことを話し合った。子どもたちにとっては、居場所や自己有用感につながるだろうと。大人にとっても同じようなことが起きてるのではないかということ話をした。ということで、関わることで、共に変わりあう、どちらも成長する、どちらも発達する、学校も地域も大人も子どもみんな発達する。そういう再生産の螺旋が作れたら、社会参加が維持できるだろうということになりました。

牧野議長：ありがとうございます。そうしたら少し時間があるので、例えばこちらのグループ（１）の方は、話が変わって大きな話で、社会の構造の話など、出た話をベースにして、今の社会の構造はそう簡単には変えられないが、その中で次の一步踏み出すとしたら、どうしたらいいのかということ少し議論いただければと思いますがいかがでしょうか。  
また、もう一方のグループ（２）、再生産の螺旋の方は、何か具体的な一つ事例を取りだしていったら、こんなことができるのではないかといいお話ができるようであれば少し深めていただきたいがいかかか。

#### ■グループワーク 2

テーマ：

【グループ 1】今の社会構造の中で一步踏み出すとしたら、どのような活動ができるか。

【グループ 2】再生産の螺旋の中で、何か事例を一つ取り上げるとしたら、どのような取り組みが考えられるか。

#### ■発表

大川委員：具体的に、今のこの状況を作ったのは私たち、大人である。先ほどの有元委員の話は非常に共感し、お互いが変わるつもりじゃないと、こっちの目線で見てもだめだなということで、どういう具体的な仕組みを作ったらいいのかという話をした。私の会社がある地元戸塚では、戸塚リビングラボというものが行われており、これは横浜市の政策局が間に入っている。これは社会全体のニーズに合致している動きになっているのではと思う。一つは大企業としては、これまでのビジネスに限界を感じて、地域に降りてきて地域のニーズを知らなければ成り立たなくなっている。ところが、優秀な大企業の社員さんも普段市民活動をやっている人はいないので、降りてこないと分からない。それで、リビングラボに来たりしている。

何をやっているかということ、大企業、中小企業、NPO がその地域の課題、地域ごとの課題を議論するというのをやっている。戸塚の場合、介護をテーマにしている。高齢化なので。介護大手のツクイさんが入っている他、エーザイさんとか大企業がどんどん入っている。それで私の方は地域の企業として入れていただいているが、要は、一つの具体的な事例をモデルケースでもいいが、そのリビングラボのような形で、地域の課題解決の場に、中学生、高校生の生徒さんが入ってこられるような状況にして、彼ら彼女らにも発言の場の機会、参画意識を持ってもらおうと、も

しかししたらこれ私やってみたい、この分野、こういうことをやってみたいという子たちが出てくると、実際に地域の参加、参画というのができてくるのではと思う。それが、ニーズがうまく合って、生徒さんが大企業の人たちと話ができるとか、地域の課題解決に直接的にコミットできるというようなところ、色んな課題はあると思うが、高齢化にしても環境問題にしても教育問題にしても。そのようなことがモデルケースとしてできると、それこそ横浜市全域、日本中いろんな課題があるので、そういった動きをとっていくことが、水平展開できるのではという話をした。

菊池委員：先ほど有元委員が話をしたベースが、先立って皆様と共有した石崎委員がお話した十日市場中学の実践事例で、それを元に私たちは色々話し合いをしていた。改めて、今の時間については、共に関わりあうことで再生産の螺旋をどうもっと広げられるかということだったが、いくつか別の視点で話し合った。十日市場中学の実践事例はとてもよくできているが、色んな地域で全てできるのかどうか、もうちょっと身近なところでそのような活動ができるには何が大事なのだろうか、という話になった。一つは、個別にみると、こういった活動に入れない中学生もいるかもしれない。大人としても中々他者と出会ったり、そういうコミュニケーションを取りにくい、そういうことは苦手だなと思う人たちもいるだろうと。そういうところにも思いを馳せた。そこで、どういうところで、この螺旋を、大川委員の発言にもあったように、広げていくのか、あるいは螺旋を太くしていくのかを考えた時に、有元委員から、今できていることをもうちょっと検証していくという作業が一つあるのでは、という話があった。もう一つは、他者と出会う機会、それが関わりの練習になるかもしれないということ。必ずしもみんなが、活動できるような人ばかりが大人にも子どもにもいるわけじゃないということを含んだ上で、それでもそういう大人に出会うこともあるかもしれないし、その多様性も含み、他者と出会う場所を、あるいは環境を作っていくというのが大事なのかなという話になった。

牧野議長：ありがとうございます。2つの大きな議論の方向性としては違う方向かと思うが、結果的にはよく似てきたような議論になるのではないかなと思う。

基本的には今社会の大きな構造的な変化の中で、子どもたちがこれからどのように生き抜いていくのかといったことを基本に考えながら、大人がどう関わりながら変わっていきけるのかといったことがこれから議論になるのではないかと思う。また、続けて議論していければと思う。少し私の方からも、みなさんの議論を伺って、感想めいたことになるかもしれないが、少し話したいのが、一つは、先ほど文部科学省の方で、地域学校協働・コミュニティスクールで地域が、と言い始めているが、その背景として、特に2015年の冬に今の大きな方向性が決められたが、昨年冬に今度は社会教育施設を一般行政に移管してもいいという答申が出たが、それは一体なんでかという、2つの社会関係が議論されている。一つは、いわゆる人工知能の問題で、よくある話だが、あと10年くらい、2030年頃に今ある仕事の約5割くらいが、自動化されて人を雇わなくなるという議論がある。

しかも、国立情報学研究所がやっている東ロボくんという東大に受かる人工知能を作るというプロジェクトがあるが、それはまだ東大には受からないが、やっていくうちにあることができてしまった。何かというと

ディープラーニングで自分でどんどん学ぶようになってしまって、今偏差値60の大学には受かるようになってしまったという話である。そうすると、日本のホワイトカラーの8割はその中に入っているということなので、そういう過去のデータをたくさん覚え込ませて、それを最適解で選択させいくというやり方というのはコンピューターがとても得意なので、今の日本の学校教育はそれをやりすぎてしまったのではないか。そういう意味ではこれからの学校のあり方を変えなければいけないという議論の中で、もう少し様々な社会体験、それから言語活動、AIができないのが実は意図と意味があるのだが、AIでは意図を読み取ることができない。そういう意味で私たちは言語を使いながら意図を伝え合うという面があるので、そうしたものも含めちゃんと議論できるような力をつけなきゃいけないということになった。さらには社会体験を積んでいきながら、ある意味で大人たちがお父さんの背中を見て生きなさいと言えなくなってしまった時代に今子どもが生きているので、そういう意味で自分で生き抜いていく力をつけていかななくてはならないのが一つ。もう一つは格差の拡大。貧困がどんどん蔓延していて、今、統計上の子ども、0歳から14歳だが、6人に1人が貧困家庭にいる。それがシングルマザーになると6割近くになる。これは世界で最悪である。貧困の状態では、アメリカ、イタリアに次いで悪い数字になる。これが一人家庭になると世界で一番悪い数字になると言われているぐらい貧困状態が進行している。こういう中で子ども食堂等様々な活動があるが、その中で子どもたちがどう自分の力で貧困状態から抜けだしながら生きていくのか。その時議論になったのが、貧困は学校教育を通して世代間で連鎖するという議論があった。

どこで楔を打ち込むのかといった時に、お金を渡せばいいかといえばそれだけでは終わらないだろうと。自分で抜け出して自分で人生を切り開く力をつけなければいけないという議論があった。そういう中で、子どもたちを支えていくために、学校だけではなく、生涯にわたって学び続ける力をつけていかななくてははいけませんよねということと、当然大人たちの生き方も変えていかなければいけないということが関わりがあって、その中で今日議論いただいたという形で、ループを描くというか循環をしていくというか、螺旋型の双方に影響を与えながら回っていくという社会のあり方を構成できないかという議論になっている。

それからもう一つは、先ほどのリビングラボも関わってくるころだが、表現が悪くなるかもしれないが、コミュニティが草刈り場になりつつあるということ。これは学校、教育だけでなくむしろ総務省、厚労省も国交省も経産省も、ほぼ全ての省庁がコミュニティと言い始めていて、小中学校区を基本にしなから、社会のあり方を考えていこうとし始めている。私もこの間、厚労関係の施設と議論していてびっくりしたのが、もう厚労省も地域包括ケアとは言わなくなってきて、地域共生社会作りという言い方をしている、社会・援護局という福祉系を扱っている局の中に、この4月から地域共生社会推進室という部屋ができた。そうこうしていたら、実は全社協という全国社会福祉協議会というのが、福祉の協議会なのだが、もう福祉教育という言い方をやめると言い始めていて、今は社会教育だと言い始めた。(牧野議長が)「いや社会教育とは…」という話をしたら、(全社協は)もう福祉は社会作りなんだと、なので社会教育というふうに我々は言い方を変えたいという言い方を始めている。その中で何を言われたかという、どこの省庁もうまく動かないと。そこで調べたらうまくいっているところがあると。それはそうでしょうと話をしていたら、それはほとんどが公民館と社会教育。そ

れで、総務（省）も厚労（省）も国交（省）も実は経産（省）までが社会教育が大事だと言い始めていて、公民館を活用して地域の住民が自ら動いていけるような仕組みを作らないともう駄目だと言い始めている。そこにはやはり子どもも巻き込みたいという議論になってきている。そういう意味では先ほどのリビングラボではないが、そういう仕組みができつつあって、もう少し市場というもののあり方も変わってきている。過去、ニーズは例えば個人の中にあると考えられてきた。だからニーズ調査をすればよかった。今はそれでは収まらなくなっていて、ニーズをとらえるためには社会に入り込みながら関係性の中でニーズをとらえていかないと実はニーズが分からなくなってしまう。そういう意味ではやはりリビングラボのようなものを作りながら、様々な方々が関わる中でニーズといったものを生み出していくというような手法に変えていかないと、従来のような社会の対応のあり方ではうまくいかなるだろうと思う。そこに子どもたちは生きているので、そこに大人たち、今まではある意味では大量生産大量消費をやってきた大人たちが、次の世代に社会を引き渡さないといけなくなっているというところにきていることだと思う。そういう意味では、今日、具体的にリビングラボとか螺旋を描くような形で関係を作りながらという議論を踏まえ、大人の関わり方をどうしていくのか、そしてどうやってこの社会を次の世代に渡していきながら自分たちも変わっていくのかというところが、これから議論にならなければいけないのかなという印象を受けた。

それからもう少し、今人生100年社会と言われているので、国は、学び直しを基本にしながらマルチステージで生きられませんか、ということをお願いしている。つい最近ではマルチではなくパラレルキャリア、乗り換えるのではなく、一度に三つか四つのキャリアが走り出すような形で人生が送れないかという議論が出てきている。そういう意味では従来のように一つのところに就職をして帰属をベースにしたような生き方ではなくなっている。その中に私たちが住み始めているので、そういう意味では社会参加という形でもう少し自分のキャリアのあり方を考えていけるような市民をたくさん育成していくといったことがこれから求められるのではないかというふうに思った。

以上で今日の議論を終わりました、次回は、もう少し具体的にどんなことができるかといった形で議論しながら、社会教育委員会議としての、より多くの方々の社会参加を促しながら、自らが社会を生き抜く力をつけていくといったところを議論できればいいなと思う。まだこれから議論はあるかと思うが、本日はこれまでにさせていただく。委員から意見や提案等あれば、いかがか。

大川委員：横浜市にお願いというか、可能であればぜひ前向きに準備いただければと思うが、せっかくみなさんから貴重な意見が出ているので、議事録だけでなく、実際の何か行動につながるような情報の提供であったりとか、例えば今回の会議でこういう意見が出て、政策局との連携ができるかどうかのご確認などをしっかりしていただいて、もし動きたいというところに、例えば小間物委員の基で、鶴見の課題解決をやっているところがあれば、一緒にトライしてみないかとかそういう話につながるというなと思っている。我々単体で動くことはできないと思うので、すでに動きがあれば、その情報をいただきたいし、おつなぎいただけるようであれば、実際にこういうふうに鶴見ではこう動いていますよ、栄区では動いていますよ、と予めいただけると、次の議論につながるかと思う。

渡部係長：リビングラボは既に政策局が取り組んでいる内容になるので、その事例

	<p>とか連携とか話してみて、次回の会議で少し状況を説明する形でよろしいか。</p> <p>大川委員：はい。</p> <p>牧野議長：今言っていたように社会教育は既に教育委員会だけのものではなくなくなってしまっている。もう少し生活の様々な領域に関わる形で展開していますので、リビングラボも含めて横浜市の方で動きがあればご紹介をよろしくお願いします。</p>
資 料	<p>【配布資料】</p> <p>■ 前回のグループワーク</p> <p style="text-align: right;">資料 1</p>